

20140220_銀座農業政策塾／第3期第2回_議事録

「コミュニティ農業（農的社会）の実践例」

日時：2014年2月20日（木）19:00－21:00

場所：東京・銀座 銀座会議室

テーマ：「コミュニティ農業（農的社会）の実践例」

発表者：蔦谷栄一氏（農林中金総合研究所客員研究員、農的社会デザイン研究所代表）

梅澤敏和さん（公務員。当塾第2期生）

尚智栄さん（会社員。中山間地ボランティア）

参加者：参加者 23人（発表者を含まない）

（会社経営、会社員、翻訳家、公務員、大学院生、NPO法人理事長、
弁護士、行政書士、司法書士など）

1. 蔦谷栄一さんから

「前回のおさらい」

日本農業は大規模化により、競争力を付ける方向にあります。海外にキャッチアップするのが狙いです。しかし、それに意味がないとは言いませんが、農業はそれだけではありません。

海外と同じような価格競争をする農業だけではダメです。もちろん、価格競争で勝負するプロの農家は必要ですが。日本の農業を守るには海外から入ってくる農産物とは違ったものを生産していく必要があります。つまり、差別化です。

そのためには地域性を出していく必要があります。小麦、とうもろこしなど輸入した農産物はどこで作っても同じようなものだからです。日本は多様性に富んでいます。いままでは、これを効率が悪いとしてきました。効率重視から考え方を変えていく必要があります。

また、消費者のニーズに対応していく必要もあります。あわせてもっと消費者が参画していく必要もあります。生産者であると同時に消費者であるような関係をつくっていくべきです。

日本を農的社会としてとらえていく必要があります。そして生産者の再生産を可能にしておくようにすべきです。たとえば、アメリカのCSA（Community Supported Agriculture 地域で支える農業）がそれです。価格のカバーと出来たものを全量消費者が購入する仕組みとなっています。

「身近にある多様な農業参画の方法・形態」

関わり方としてはいろいろあります。1. 都市部、2. 農村部、3. 都市・農村交流にわけて考えてみましょう。

1. 都市部

（1）方法・形態

・市民農園。特区や法律改正があつて、農家が自分で開設できるようになりました。市民が区画された農地を借りて自分で耕作するものです。

- ・体験農園。農地を借りるのではなく、あくまで農家の生産をお手伝いする形態です。生産した農産物は農家からもらったり、購入したりします。農家はレッスン料をいただくことができ、経営の複合化につなげることもできます。

- ・コミュニティガーデン。日野市などで行われています。耕作放棄地や空地を利用するものです。ビルの建て替えなどの際に一時的な使用をするものです。名目上は農地として利用するものではありません。このため、都心でもできます。ニューヨーク、シカゴなどで流行っています。米国の場合は、貧困者対策の側面もあります。

- ・屋上農園。従来、土は重いので造成や管理が困難でした。最近、技術が進んで普及するようになりました。補助金が出ることもあって都市緑化の流れの一つともなっています。

(2) 広まった理由

- ・コミュニティがキーワードになっています。一緒に農作業をすることで、お隣りで農業をされている方とお話することができます。良いきっかけになっています。

- ・合理的効率的な空間である都会で違った世界が欲しいというニーズがあります。

2. 農村部

(1) 方法・形態

- ・新規就農。青年就農給付金などの助成金が支給されています。アグリイノベーション大学などの新規就農講座も増えています。受講生には熱心な人が多いです。いままでの農業者は農村の子弟が大多数でした。現在は法人化が進んでおり、従業員として働く形態が増えています。そこでのご縁から、地域の実情がわかり、農地を借りて、自立していく。そういう受け皿ができてきています。また、新規就農者には若い人が増えてきています。

- ・定年帰農。団塊の世代についてはピークは過ぎた感があります。農村に行くべき人は行ってしまったようです。

- ・半農半X。増えています。プロの農業者を目指すというよりは、得意分野を活かして複合経営を行っています。半Xでネットを活用して仕事をしている人が多いのが特徴です。従来よりも就農が弾力的になっています。

(2) ポイント

- ・プロ農業を目指すのか生きがい農業を目指すのか。

- ・定年帰農では単身か夫婦一緒か。夫婦の相手方と早めに農村部に行って理解を獲得しておかないと単身となることが多いようです。

- ・田舎暮らしか別荘生活か。前者は地域の人との付き合いを行うことになります。地域のいろいろ事情を飲み込む必要があります。

- ・日帰りか長期滞在か。

3. 都市・農村交流

(1) 方法・形態

- ・二地域居住。一か所に定住するのではなく、都市と農村を行ったり来たりします。ライフサイクルの一つとして位置付けられます。

たとえば、エクレシアファーム（山梨県）。日野市周辺にお住いの男性15～16人で耕作放棄地と古家を借りて、有機農業をしています。15～16人いることのメリットは常駐者を置くことができるところです。また、知恵を出し合えることです。

- ・援農。たとえば、韓国では「一企業一農村」にて都市・農村交流を行っています。
- ・グリーンツーリズム。世界的に展開されています。その変形としてワインツーリズム（山梨県）があります。山梨県にはワイナリーがたくさんあるので、一日かけてバスで回ります。

（2）ポイント

・日本人は個人よりもグループでやるほうに向いています。しかし、都市・農村交流は個人のほうが良いのではないのでしょうか？ こちらのほうが地域に溶け込みやすいです。交流を深く行うのならばお薦めです。もちろん、とっかかりはグループもかまいません。都市のマンション単位で一つの農村と交流するというようなケースもあります。

「農的社会報告」

蔦谷さんの畑は福岡正信さん方式の自然農法をイメージして行ってきましたが、難しいです。途中で福岡方式に若干手を加えた奈良県の川口由一さんの方式に切り替えました。

24年前に竹林400坪を購入して開墾し、100坪を宅地にし、300坪、ちょうど1反を畑にしています。法律上の農地としては購入できないため、宅地にして購入しました。法律上の農地に戻そうとしたのですが、農地法は宅地から畑に戻すことは想定していないためできませんでした。

畑を自分では“キッチンガーデン”と呼んでいます。畑からもいだ野菜をすぐにキッチンで茹でて食べることができるからです。

9年ほど前から養蚕農家を改築した建物を借りてみんなの家・農土香をオープンしています。2ヵ月に1回、田植え、雑草取り、稲刈りなど子どもの体験教室を行っています。田舎の暮らし体験も目的にしており、真冬でも実施しています。炊事、配膳、片付け、廊下の雑巾がけ等もしています。

大人の体験教室も行っています。縄文式土器を作ったり、地元の窪八幡の参拝をはじめハイキング等を行っています。地域の歴史・文化を知ることにつながります。以前は、子どもの体験教室の後、夜は大人だけでワインを飲んでいたのですが、大人の集まりもやってほしいとの声が出るようになり、現在、年に3回ぐらい大人だけの集まりをしています。地元の人たちを巻き込んでのコミュニティカフェや石窯ピザに発展しています。

また、都下、西東京市田無にておむすびハウスを昨春から始めました。後期学童保育ということで小学生5～6年の居場所を作ることを目的としています。実態は大人の居場所ともなっていて、世代をまたぐ取組みとしています。

2. 梅澤敏和さんから「家庭菜園を始めて」

区役所の職員にて、江戸川区在住です。以前は、出先の出張所にてコミュニティ（町会、青少年団体など）を担当していました。長く地縁団地で地域活動をされている方々と公募で地域活動に入ってくる方々とは、意見の相違があり、あつれきがありました。地域課題のひとつが「地域緑化」でしたが、景観などの発想が異なり、場を取り持つのに苦労していました。

そのようなときに、銀座ミツバチプロジェクトを知りました。このプロジェクトが提唱する「食べられる景観づくり」に感銘を受けました。「農」は諸問題に横串を刺して、改善ができることに気がきました。さらに、養蜂講座に参加してはまりました。バスを雇いあげて地域団体の方々を連れて農業生産法人アグリクリエイト本社（稲敷市）へ、食品残渣のリサイクルを見学しました。また、銀座ミツバチプロジェクトのご協力をいただいて、「食育フェスタ」を開催しました。

その後、人事異動があり税務担当となり、コミュニティとは無縁になってしまいました。農や食に関する地域活動は、共感はいただきましたが拡がることはありませんでした。しかし、活動のすばらしさに目覚め、仕事を抜きに、ファームエイド銀座に毎回参加するようになりました。

自宅の隣地の地主より境界を確定したいと申し出を受け、フェンスの取換えを了承しました。これを機に小庭の改造を決断しました。除染も含めて、30センチ程度の土（2トントラック1台分）の入れ替えを実施しました。

銀座農業政策塾第2期終了後、家庭菜園への改造を開始しました。NHKの「やさいの時間」を参考にしましたが、キャベツやレタスはほとんど虫に食われてしまいました。それでも野菜は成長し、そして収穫できました。作物を実際に育ててみて初めて、たとえば間引きの必要性を実感したりしましたし、収穫の快感を味わいました。キャベツについての虫を小鳥がついばむなど、生態系や生命原理をあらためて実感しました。また、土を耕すことの心地良さを体感しています。放置栽培では収穫は微小です。今後の課題ですが、栽培法の指導を受けたいです。体験農園にはニーズがあると気がきました。

消費するだけの生活から、生産者の労苦に思いをはせることができるようになりました。野菜が店頭に出るまでの時間やコストを体感することができました。

今後の方向ですが、栽培法や地力をあげるための指導を仰ぎながら実践していきます。また、子どもの関心をいかに継続してひきつけるか。そして、収穫祭を実施できるほど収量を上げたいです。

「農」のもつ多面性に期待しています。「農」は食糧生産だけではありません。命をつむぎ、人をつなぐ機能があります。コミュニティの立ち位置も「農」にあると実感しています。

3. 尚智栄さんから「都会生まれ都会育ちの私が、なぜ、田舎（自然、農、人）に魅かれはじめたのか？」

元々は都会信仰が強かったです。日本は東京と大阪だけで十分と考えていました。

Facebookにて友だちからの投稿がありました。そこには、「奇跡の棚田。田舎こそ最先端！」と書いてありました。そんなバカな田舎で最先端なことはあるはずがないと考えました。しかし、友だちからの紹介なので、怖いもの見たさでイベントに参加しました。イベントは岡山県美作市上山集落で開催されました。千枚田のあるエリアです。耕作放棄地になっていて草だらけになっていました。友だちらで草刈りを行って棚田を復活させました。

古民家（民宿）から見た棚田はとてもおしゃれです。100円の市販のパンの朝食でも気分が良いです。棚田が雲海に入っていくのを観ることができました。地域のおじいさん、おばあさんたちも棚田を草刈りしたことで見えてきたことに感謝しています。棚田の竹藪があったところに古民家カフェを作りました。7～8年をかけて限界集落の立て直しをはかっています。

いま、上山集落には若者が一杯います。初めて上山集落に行ったときにはびっくりしました。その中の数人は地域おこし協力隊として入ってきました。ある大学生は美作市に移住することを決めました。大阪で「棚田団」が結成され、面白い人の流れ・集まりができています。東京からの移住者もいます。タップダンサーもその一人です。TVで上山集落を観て知ったそうです。その方を中心として「1000人で棚田でタップ」を行い、メディアに取り上げられました。楽しんで限界集落を再生しています。

地元の人も、ワカモノ・ヨソモノ・バカモノを応援しています。一昨年、8年ぶりに村の夏祭りが復活しました。お年寄りが上山集落に若者がいると嬉し泣きしていました。放棄された資源を再生しています。持続可能か社会づくりを行っています。そして、エンジョイしています。

稲刈り（繁忙期）を「棚田団」、そしてそれ以外の人も手伝いました。稲刈りの時期にイノシシに荒らされました。ほんとうに腹立たしいです。TVで害獣駆除というニュースを観ていたときはかわいそうと思っていましたが・・・。イノシシなどを仕留めて、命をいただいています。これを意識して生活しています。イノシシの皮もiPhoneケースにします。命をまったく無駄にしていません。しかしそれだけでは生きていけません。棚田米を商品化し、販売しています。

「楽しいことは正しいこと！」です。

上山集落で起こっているなにやら得体のしれない「田舎革命」をもっと知りたいと考えました。香川県直島市で追い込み漁、山梨県小菅村で間伐、東京都奥多摩村でチェーンソーを体験しました。

田舎に行って感じたことは次のとおりです。私たちは自然の恵みを享受しています。命をいただくという感覚が薄くなっています。都会は命との距離があり過ぎます。しかも、そこに疑問を持たずに生活できてしまいます。田舎に行くとは、生かされているという根本的なところを感じることができます。生きる力、たくましさです。田舎に住む人はなんでもできます。獣とも戦えます。生命力が強いのです。田舎に行った翌日、会社に行くと、男子がひよろっとしていると感じます。ほんとうに生きていけるのか？と疑問を持ちます。

田舎は肌感覚にて生きる知恵を持っています。自分に生きる力があるか？と自問してしまいます。田舎＝癒し？ではなく、田舎＝パワーです。田舎から生命力、エネルギーをいただくこ

とができます。都会が失ったものは、自然とのつながりに対する感謝、いのちとのつながりに対する感謝、地域社会とのつながりに対する感謝です。

まとめとして……。人生にはいろんな生き方があります。都会でしか生きていけないと考えていましたが、そうではないことを田舎で学びました。都会も面白いし、田舎も面白いです。都会と田舎との距離を縮めていくべきです。

ちょっとずつ農的エッセンスを増やしていきたいです。

以上